



唱歌教育と大和田建樹

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山東, 功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011073

唱歌教育と大和田建樹

山東 功

一 はじめに

広く愛唱されている唱歌や童謡のあり方が、近代日本の歩みを体現したものだという事実は、多くのところからうかがい知ることができる。例えば「汽笛一声新橋を」で始まる「地理鉄道唱歌」も、殖産興業と鉄道敷設の全国的展開なくしては成立しなかつた。また「故郷の空」のように歌詞は雅文調でありながら、音楽はスコットランド民謡であつたりするところなどは、近代日本における西洋音楽受容の歴史そのものである。さらに今日では全く歌われなくなった唱歌群からも、音楽性を犠牲にしてまでなぜ作曲されたのかということを見ていくことで、当時の社会的背景を知ることができよう。大正期以降は唱歌の官制的な性格を嫌って、鈴木三重吉らが主導した童謡が作られたり、戦前の朝鮮や中国においても日本の唱歌を手本として教学

的な唱歌が編纂されている。^① いずれにせよ、唱歌を通じて「懐かしい日本の歌」なるものの表象について史的展開を追うことの、有効性がうかがえるのである。

本稿は、そういった唱歌の歌詞に注目することで、近代日本の教育における唱歌の位置とその意味について考察を試みようとするものである。その中でも特に、既出の「鉄道唱歌」や「故郷の空」の作詞者として有名な大和田建樹（おわた けんき一八五七—一九一〇）に焦点をあてて、明治中・後期唱歌教育の特質について検討してみたい。大和田は明治中・後期唱歌の作詞を多く手がけており、当時を代表する文学者であつた。その意味において本稿は、もし唱歌の文学史といった領域を立てるとするならば、それが教育史的にどのように位置づけられるか、ということとを問う作業になるだろう。

二 唱歌教育と教育思潮

明治期の唱歌教育史をふりかえる場合、木村（一九六五）をもとにして、明治前期（明治二〇年代まで）、明治中期（明治二〇年代）、明治後期（明治三〇年代以降）に時代区分を行うことが可能である。具体的には、文部省音楽取調掛による唱歌教科書の編纂時期、検定教科書の時期、国定教科書の時期に該当する。ただ唱歌教育の場合、教師養成や教材作成といった教育体制が長らく整備されなかったため、修身や国語といった他教科とは異なり、時代に若干のずれが生じている。また教育実践もかなり後の時代に至っても不十分な場合が多く、例えば明治三〇年代の時勢について日本教育音楽協会編（一九三四）では次のように概括している。

当時の音楽界は、全く新しい教育思想を顧みることなく、音楽取調掛に於て学びたる所謂米国式の実物教授や問答教授その俣の教授法を墨守し、一向に新時代に即したる新しい方法に依拠することがなかつたやうに見える。

（二〇四頁）

そうは言いながらも、明治二四（一八九一）年の文部省令「小学校教則大綱」や明治二六（一八九三）年公示の「祝日大

祭日歌詞並楽譜」などにより、唱歌教育では徳目主義が重視され、極めて道学的な内容が唱歌に盛り込まれていくことになった。ここには明らかに当時の教育思想の影響が見られる。それは、文部省音楽取調掛時代の伊沢修二やメーソンがペスタロッチ式教授法を取り入れようとした時代から、ヘルバルト主義教育学の普及する時代への転換でもあった。

明治二〇（一八八七）年に来日したドイツ人教師ハウスクネヒトは、本格的にヘルバルト主義教育学を日本に導入した人物として知られている。竹中（一九八七）が「政府当局者にとつて極めてありがたい存在であった」（二七四頁）と評しているように、ヘルバルト主義は教育勅語成立以降の教育思想に極めて合致したものであった。正確には谷本富による、ドイツとは異なった日本の普及形態と補足すべきであろうが、いずれにせよ、ヘルバルト流の徳目主義は唱歌教育にも大きな影響が見られるのである。それは教科統一論と称される、教科間の関係を密にする教授法の実践が関係していた。谷本は「実用教育学及教授法」（明治二七（一八九四）年）において、ヘルバルト主義における教育の目的は「品性陶冶」にあるとし、「教育者の鑄造すべき被教育者の心性は、数種の能力の叢合にあらざして、唯一不二の意識なりといふことを以て、其心理学の主眼とする

なり。」(三六頁)と主張した。さらに唱歌教授法について中国古典の『楽記』まで例に出しながら、以下のように音楽の感化力の効用を説いている。

蓋し唱歌は聴覚并に発声機関を陶冶して、其声音を以て他人の心情を洞察し、また自己の情感を他人に伝ふるの便を与ふるを以て、他人の安否苦楽を喜感するの念を発すべし。而して会同合唱の如きは、共同団結の志を強くし、勇健の歌章は、士気を鼓舞し、愛国心を振起するの効偉大なればなり。(一二三〜一二四頁)

このような唱歌教育については、文部省音楽取調掛の段階でも伊沢修二が主張しており、全く新しいものとは断言できない。しかしながら拙稿(二〇〇〇)でも言及したが、明治前期の唱歌教育における情操面には、多分に国語教育的発想が関係しており、極言すれば国語教育と音楽教育とが同一性を帯びて存在していた。しかるに明治中期以降は、教育勅語に代表される修身教育の中で唱歌も認識され、結果として歌詞そのものの言語的側面以上に内容面が注目されるようになったのである。このことは歌詞が単なる暗記要素に墮したことを意味するが、この点については後述する。

こうした徳目主義が唱歌教育へと流れていったことに加え

て、明治二七(一八九四)年の日清戦争勃発により、後に徳目唱歌と軍歌の時代と概括されるほど、明治中期には唱歌の内容も変化していった。先の教育的に高邁な理想とは別に、単純な旋律による軍歌や流行歌の蔓延という、音楽そのものによる情操教育とは別のレベルで、唱歌は普及していったわけである。これはヘルバルト主義教育学が衰退し、実業教育的教育目的論へと転換していく過程とも一致している。そして、ヘルバルト主義教育学が教授法中心主義へと変化していく中で、唱歌教育も一層実践的な教育科目として意識されていくことになるのである。このことをもつとも象徴的に表しているのは明治四三(一九一〇)年刊行の文部省編纂『尋常小学読本唱歌』である。この唱歌は歌詞をすべて『尋常小学読本』から取っており、読本教科書の内容を唱歌によっても教育しようとした意図が明白に現れている。³⁾

唱歌が純粹に音楽教育を目的にしたものではなく、他教科の補助科目という性格を強く示している例は、今日全く歌われないう唱歌群の中に見いだすことができる。その一つに、明治四四(一九一一)年刊行の『国民教育日本唱歌』(芳賀矢一作歌、田村虎藏・松岡保作曲)が挙げられる。二五番まである歌詞の中から、主要なものを以下に抄出する。

我が日本の国体は、世界万国無きところ、
遠き神代の昔より、君臣分は定まれり。

(一)

山川すべてうつくしく、津々浦々の砂白し。
清き景色に感けてぞ、人の心もいさぎよき。

(四)

前に台湾、澎湖島。後は樺太、朝鮮と、
二大戦役事果て、いつも加はる新領土。

(一〇)

郵便、電信、通信の、便利はいふも愚にて、
今は全国都会の地、長距離電話自在なり。

(一二)

国の進歩に伴なひて、貿易年々発展し、
輸入輸出の総額は、八億円にも上りけり。

(一六)

此の帝国に生れ出て、此の大御世に遭ひし身を、
おもへば嬉し御民われ。おもへば嬉し御民われ。

(二五)

ここに求められているのは、単なる明治日本の概観であり「長距離電話」や「八億円」といった具体的な事実に過ぎなかった。

唱歌教育と大和田建樹

これを詩歌とすることもためらわれるが、唱歌とは何であったのかという一例は示しうるだろう。事実、伊藤(二〇〇一)には明治四〇年代の唱歌について次のような指摘がある。

現代と違うのは、社会に大事件が起ることに唱歌が出来て、小学校で教えられたことだ。いわばニュース唱歌であり、
際物唱歌である。昔の瓦版のはやり歌の伝統ともいえようか。
(二九六頁)

小出浩平氏は「曲の力で、歌詞を暗記させる旋律奴隷の唱歌」(小出(一九八二)三六八頁)を「まま子唱歌」と呼んで批判しているが、こうした唱歌の典型例が、第一集(東海道)六六番、第二集(山陽、九州)六八番、第三集(奥州線・磐城線)六四番、第四集(北陸地方)七二番、第五集(関西、参宮、南海各線)六四番、計二七四番まである『地理教育鉄道唱歌』であり、その作詞者こそ大和田建樹なのであった。

三 唱歌教育と大和田建樹

明治二〇年代以降の文芸思潮における大和田建樹の評価は、新体詩の普及者として語られることが多い。とりわけ明治二七(一八九四)年刊行の翻訳詩集である「欧米名家詩集」の七五調は、その後の模範的な詩形として意識されていた。しかし

ながら岡本（一九六一）において指摘されているように、大和田は決して単純に七五調を選択したわけではなく、さまざまな試行錯誤の結果によって、その詩形を獲得していったのである。このことは大和田が明治二六（一八九三）年に、新体詩に関して理論的に言及した『新体詩学』の中で示されている。

大和田は学制頒布以降における唱歌や、宗教家による讚美歌の翻訳などを例に挙げて、新体詩の一門を最初に開けたものだと評価しながらも、これらは「唱歌の一部門なれば、新体詩の目的を満足せしむるに足るものに非ず」（三六頁）として、さまざまな句格による可能性を指摘した。具体的には以下の句格を例示している（実例は最初のものを出した）。

- 五四 たがならず。いとたけ。
- 五五 おもしろの。ありさまや。
- 五六 はるかぜは。はなのうへに。
- 五七 うぐいすの。きなくはべるは。
- 六四 くにかたぞ。こひしき。
- 六五 ひけやひけや。このくるま。
- 六六 はるのいろは。そらにみちて。
- 六七 いざうちつれ。のべにあそばん。
- 七五 ねぐらにかへる。ゆふがらす。

- 七六 かみはめぐみを。のべのくさに。
- 七七 わがやのまへの。やなぎのこかげ。
- 八四 ともせやほたるよ。そのひを。
- 八五 あさひにかゝやく。そのみはた。
- 八六 あはれまつひとの。ふねはいづこ。
- 八七 は、なきわがやは。やみゆくこ、ち。
- 八八 まつこそありけれ。うめこそありけれ。

（四三―四五頁）

さらに「拙稿二三首を引き、議案の説明に代へんとす」として自作を挙げている。

熊と虎（全首三段の内中一段を引く）

- あはれ虎よ（六）その虎（四）
 - 誰かこゝに（六）とらへし（四）
 - 月に吼ゆる（六）気力は（四）
 - いまはいづこ（六）やよ虎（四）
- （四七頁）

このような実験的な方法を模索している点について、大和田は明治三〇（一八九七）年刊行の詩集『新編唱歌詩人の春』（明治二〇年刊行『詩人の春』の改版）の序文で次のように述べている。近きころは、西洋の思想日々に入りこみて、詩歌もや、面目をあらためんとする勢あり。あるひはわが国の歌に押韻

なして、かれに習はんといふもあれば、ペルソニフヒケ
ーシヨンのかれに富めるをうらやむもありて、おのづから
かの古体の簡單淡白なるものをばおきて、この精密富麗の
新空気に向はんとするは、人情のまぬかれぬところ、わが
国、文学の風潮を未来に卜するに足るべし。(一三三頁)

さらに大和田は、明治二七(一八九四)年刊行の『明治文学
史』の中で、明治一〇年代の詩歌改良論について『新体詩抄』
と『小学唱歌集』の二途があり、それぞれ次のような特徴があ
ったと指摘している。

前者(『新体詩抄』引用者注)は謂はゆるポエムを起さん
とするものにて用語は通俗平易を主とし、後者は謂はゆる
ソングの手本にして語気往々古調死格に傾けり。是れ其大
なる差別なり。(一八五頁)

この古調死格に傾く唱歌に対して大和田が示したものが、明
治二一(一八八八)年刊行の『明治唱歌』であった。第一集所
収の「故郷の空」は極めて人口に膾炙しているが、句格は「夕
空はれて あきかぜふき つきかげ落ちて 鈴虫なく」(三二
頁)というように七六調の斬新なものである。こうした斬新な
例は同じく第一集所収の「春の歌」にも見られる。

うたへうたへ春をむかへて。

うたへうたへ鳥とともに。

いざや野も山も歌の声そへて

合はせその調かへせこだま。

空ものどか花もさかり。

うたへうたへ鳥よともよ。(一)

(九頁)

この曲は八分の六拍子の弱起で始まるため、当時としても歌
い難かつたであろうが、こうした実験的な試行錯誤の結果、最
終的には新体詩が基調とする七五調へと向かっていく。ここに、
唱歌に対し音楽性の涵養とは別に要求された歌いやすさとい
う点での一致があり、大和田の唱歌創作に対する一つの方向性を
指し示したことになるのである。

四 歌詞の教育的意味

導入しやすさという教育技術的な面から唱歌を捉えた場合、
もつとも効果的なのは暗記を中心とする教科である。とりわけ
規律性を重視する国語、修身、地理、歴史において暗記は重要
な要素であった。教育勅語を暗誦するように、活用変化や歴史
年号・地名国名も暗記すべき対象である。結果としてこれらの
教科は唱歌とも不可分の関係にあった。

大和田はこうした唱歌の作詞を多く手がけたわけだが、その

歌詞は先に掲げた芳賀矢一の『明治唱歌』のようにおしなべて平板である。暗記すべき内容を多く盛り込もうとした結果、七五調という口調の問題しか重視されなくなったからである。また歌風が雅文調であったため、全体に冗長な印象を与えたこともあり、大和田の評価は文学史的にあまり高くない。斎藤茂吉の「平凡無味で駄目なのが多い」(斎藤(一九五〇)三八五頁)といった評が一般的であろう。なお斎藤の評には正岡子規以来の御歌所派の平板な歌風に対する批判の文脈が存在するが、この点については短歌文学史的検討を要するため本稿では取り上げない。

大和田は明治一六(一八八三)年の古典講習科講師就任以後、明治一九年には高等師範学校及女子部教授として国文教育に従事していたが、明治二四(一八九一)年には職を辞し著述業に専念している。明治四三(一九一〇)年に没するまで、跡見女学校や青山女学院などの私学講師を歴任しているが、本業はあくまでも民間の文学者であった。この大和田の略歴は時勢迎合の意味がある程度明らかにしているものといえよう。それだけに大和田は時勢の要求に対して、ある意味ではかなり器用に応えている。唱歌に関して言えば、教育者であった立場も関係していたのか、教育に何が望まれていたのかを適切に反映させて

いるのである。以下、この点について修身や地理教育などを例にとつて見てみたい。

修身教育を考える場合、教育内容が五倫の常といったいわば高次の抽象的段階から、挨拶の励行などの日常実践倫理に至るまで、極めて包括的かつ網羅的に組織されていたことに注目する必要がある。こと公衆道徳に関していえば、それこそ瑣末といえる程の綿密な規定がなされていた。明治三三(一九〇〇)年に、尋常小学校教員用に編纂された普及舎編輯所編『尋常小学校用新編修身教典』には、修身教科書「第二十三課 公德」の項について次のような解説がなされている。

(本課の目的) 公共物、および、公衆に対する心得をしらしむ。

(教授上の注意)

一 公共心、および、公德の欠乏せるは、わが国民の欠点なることを、各種の卑近なる実例によりて、理會せしむべし。

一 明治三十二年七月以後は、外国人も、自由に内地に雑居することとなりたれば、わが国民の徳義は国家の体面にも関することを知らしめ、一層公德に意を用ゐしむべし。

一 各項に関する実例をあげ来りて、ことに、日常、これ

ら、徳行の実践を上げますべし。

一 公衆衛生と、時間を守るべきことにつきては、わが国の人のもつとも注意すべきことなるを知らしむべし。

(主要なる質問)

一 公共に関して、日常、注意すべき事項を挙げよ。

(三七〜三八頁)

ちなみに、ここで挙げられている明治三二(一八九九)年は外国人居留地が撤廃された年である。こうした教育における公德は、例えば明治三五(一九〇二)年刊行の帝国教育会編「公德養成」における次のような公德の定義と同一である。

公德とは社会公衆に対して行ふべき道徳にして、一身一家の間に行うべき徳即ち私徳とは自ら区別すべきものを謂ふ。されば公德は之を客観的に云ふときは社会的義務となるなり。(四九頁)

この公德思想の普及に関しては、道徳的であることの内実を具体的に示す必要があったため、多くの実用書も著わされている。いわゆる公衆マナー本の成立である。明治三六(一九〇三)年刊行の読売新聞社編「公德養成之実例・附英人之氣質」などがその一例である。ここでは公德について「多人数群集の場合に於ける公德、公共物に対する公德、他人の事業及所有物に対

する公德、金銭物品の受渡に関する公德、約束に対する公德、規則に対する公德、政治に関する公德、商売に関する公德、同情を表すべき場合に於ける公德」が挙げられている。なお注意したいのは、こうした公德思想にイギリスのジェントルマン気風の導入が関係している点である。日本古来の美德というよりも、西洋の近代的な生活における道徳性を意識しているといったほうがよいだろう。これは教育勅語発布以降の「国民道徳」の形成において、倫理学や国民道徳論を担った近代学知と、実践形態としての公德とが共役的に働いていたことを意味する。すなわち、教育勅語に内包していた伝統的儒教倫理と共存する、近代的市民倫理の涵養こそが求められていたということである。子安(二〇〇三)が「近代国家日本の要請に於てアカデミズムで構成されてきた倫理学」(二三二頁)と指摘する学知の層の、まさに下部を担う教育体系の中に公德は存在していたのである。そしてこうした公德を支える教育思想として、ハウスクネヒト以降の日本型ヘルバルト主義が関与していたことはすでに指摘したとおりである。しかも教科間の連携を説く教授法も大変重要な意味を持っていた。

それゆえに、公德思想が唱歌にも反映していくことは当然の成り行きであったといえる。実際、明治三五(一九〇二)年刊

行の東京府教育会撰「東京公徳唱歌」(大和田建樹作歌、小山作之助作曲 以下「公徳唱歌」と略す)における序には「本会ハ此唱歌ヲ普ク府下学生子女ノ間ニ口唱セシメ自然ニ公徳上ノ思想ヲ養フノ一助トナサンコトヲ希望スルモノナリ」(岡部長職東京府教育会長)と、公徳唱歌の編纂趣旨が述べられている。公徳唱歌の歌詞は全部で二五番まであり、曲調はハ長調四分の二拍子である。教育勅語を敷衍したような歌詞から始まり、後段から極めて具体的な内容にまで踏み込んでいく。

上には万世一系の、天皇陛下をいたゞきて、
御膝のもとに住居する、我東京の府民等は、
忠と孝との行を、しばしのひまも忘るなよ、

(一)

人に長者と幼者あり、幼き者は年上の、
人をうやまひたふとみて、老をいたはり助けつゝ、
我より若く幼きを、あはれむ事は人の道、

(三)

鉄道馬車や汽車の中、込み合ふ場所の出入口、
先なる人を押しつけて、我先づそこに進み入る、
無礼粗暴のふるまひは、未開の民のすることぞ、

(五)

歩行の人は人道を、車は車道をすゝみつゝ、
橋とちまたのわかちなく、左のかたをあゆむべし、
我に道聞人あらば、委しく告げて迷はずな、

(九)

外国人を取りまきて、珍しがほに見物し、
彼をあなどり笑ふ人、あるこそ国の恥辱なれ、
是等の悪しき風習を、払へや一日も速かに、

(一一)

こゝやかしこに塵を捨て、みだりに樹木の枝を折り、
壁板塀の分ちなく、楽書するは何者ぞ、
わるしと聞かば改めて、又と犯すな犯さすな、

(二〇)

机腰掛大切に、損ぜぬよーにあつかひて、
運動時間のくる時は、共に楽しく庭に出で、
ブランコはひ合ふ事もなく、遊べ楽しく睦ましく、

(二二)

男子は陸海軍隊に、身を捧ぐべき務あり、
女子は子孫を教育し、世に立たすべき務あり、
我等ちひさき国民も、心は世のため君のため、

(二四)

されば世のため人のため、よからぬ事と曉りなば、

今より後は心して、ゆめにもなすな行ふな、

世人の模範を示すべき、わが東京の府民等よ、 (二二五)

こうした公德唱歌は他に明治三六年刊行の帝国教育会編『公德国民唱歌』(田草川喜作作詞、上真行・鳥居忱添削、田村虎蔵作曲)などがあり、内容は大和田のものと近似しているが「よに恐るべき流行の、病を避くる道あれど、若しも病にか、りなば、先づ応急の手当して、包み隠さずためらはず、医師の治療を求むべし。」(一一番) というような公衆衛生の内容も含めている。付言すれば、共に「棒引仮名遣」を用いている点が興味深い。

いずれにせよ公德唱歌は、具体的な道徳実践の蓄積を経て、最後は忠君愛国へというように繋がっていくという内容となっている。これこそが公德の目するところであったのだが、結果として唱歌が介入する必然性は、たとえ教科連携に基づく総合的な人格陶冶が企図されていたにせよ、少なくとも歌詞の内容や旋律の単純さを見る限り、導入しやすさという教育技術的な側面でしか存在しなかった。この点は暗記主義が徹底する地理・歴史教育においてさらに顕現化されていくのである。

例えば地理教育では、往来物などを通じて行われたそれまでの地名暗記重視型に対して、地理学の基本としての観察重視型に転換していったことが知られている。しかしながら、それは一つのモデルとして捉えられるべき位相であって、地名暗記という内実に変化は起こらなかった。ここに唱歌が介入する外形の根拠が存在するわけだが、坂本麻実子氏が「口調から旋律への転換」(坂本(一九九一))と重要な指摘をしているように、暗記に対する西洋音楽受容の影響が顕在化していったことに注目すべきである。唱歌にとって音楽性が重要であるにせよ、旋律が複雑であるならば暗記には不向きである。いわゆるヨナヌキ調が流行したのも、親しみやすさや歌いやすさが存在したからである。坂本(一九九一)によれば大和田の『地理鉄道唱歌』以外にも地理唱歌は明治期だけで七二曲も存在し、そのほとんどが七五調である。坂本氏が地理唱歌を「往来物で培われた歌唱の復権」としている点については検討を要するところだが、地理教育が鉄道といった交通手段によって構成されていく過程に、唱歌が利用されていったという構図は、明治期の教育実践を考える上で注目すべきであろう。同様の交通機関には船舶や航空機もあり、当然ながら「航海唱歌」や「航空唱歌」も作られた。日本に限らず世界にも範囲は広がり「世界唱歌」も存在

している。なお大和田は『満韓鉄道唱歌』を作詞しているが、これが日論戦争終結後の明治三九（一九〇六）年の作であることに、地理教育以上の意味を感じることができよう。

ところで、実学的風潮が広がる明治後期には産業教育の意義が多く説かれることになったが、唱歌はそれをも忠実に体現化していく。大和田は明治四一（一九〇八）年刊行の全国工業学校長会議選定『工業唱歌』（田村虎蔵作曲）を作詞しているが、唱歌制定に際し「我国工業思想の普及涵養に資するあらんことを望む」（はしがき）と述べられているように、目的はあくまでも工業思想の普及である。内容は「一 技術の力、二 真の技術者、三 工業の花、四 文化の恩人」の四曲からなり、「四 文化の恩人」ではワット、スチーブソン、ハート、エジソン、左甚五郎を挙げて、功績を称えている。以下、エジソンと左甚五郎の部分を抄出する。

身は鉄道の小ボーイ、実験室を我部屋に、
つくりて研きし学成りて、発明遂げたる電灯の、
めぐみを遺すエヂソンは、地球を照らす光なり。

（四、トーマス、エヂソン）

わがたのしみは貧しきに、ありと歌ひて里人の、
笑ふも知らず顧みず、一心刀を手に執りて、
彫刻つとめし甚五郎、「左」の名こそ八千代なれ。

（五、左甚五郎）

左甚五郎がエジソンと同列に扱われるところなど都合のよい話だが、重要なことは工業技術を教育上に反映させることへの、いわば執着にも似た態度そのものである。

また大和田の作詞した唱歌における産業との関係では、堺市が水道敷設を広告する意味で、明治四二（一九〇九）年に刊行した『堺市水道唱歌』（田村虎蔵作曲）などが挙げられる。堺市の風物の紹介を全般に行いながら、水道敷設の意義を説くこの唱歌は、さながら行政パンフレットのようである。

海陸交通便利よく 商工業の道進み
前途多望の堺市は 人口ゆたかに六万余
その人命を支ふべき 飲料水の良悪が
市の衛生と盛衰に 関する利害は幾許ぞ

（二）

（三）

自然に任せて捨て置かば 多くは不良の質なるに
悪疫一たび襲い来ば 六万生靈いかにせん

(四)

天この民を振り捨てず 人この自然に甘んぜず
ここに起しし大工事 水管延長十三里

(五)

大和田は時勢に順応して、いわゆる「まま子唱歌」の作詞を多く手がけたわけだが、その内実はこういったものだったのである。

五 おわりに

以上、大和田建樹の歌詞をもとに、明治中・後期の唱歌教育と教育思潮との関係について若干の考察を試みた。本稿では紙幅の都合上、ヨナヌキ調や日本音階の受容といった、唱歌の音楽的側面についての言及が十分にできなかった。この点については別稿に委ねたい。なお付言すれば、「春のうららの隅田川」で始まる「花」を第一曲とする滝廉太郎の『四季』のように、唱歌を音楽性に乏しいものとして批判し、音楽性を重視した日本歌曲として作曲された経緯を持つ音楽が、今日ではなぜ唱歌と同一視されてしまうのかという点は、先に言及した童謡が唱歌と混同されるように、大いに検討すべき問題ではあろう。そ

こには「懐かしい日本の歌」なるものの表象が関係しているはずである。

また大和田の作詞した唱歌については、『明治唱歌』における翻訳詩との関係や、文法と唱歌とを一致させた『日本文典唱歌』など、個別具体的に検討すべきものも多い。今後はこのような唱歌の内実と史的展開を見ていくと共に、今日まで脈々と継承されている市歌や校歌といった公的な歌の性質について考察を進める必要があるだろう。それは国歌と軌を一にして共振する近代国民国家の文化的統合の一類型だからである。このことは「国語」の編制とも決して無関係ではない。本稿は、その各論として位置付けられるものであった。

注

- (1) 本稿では全く言及できなかったが、植民地支配下の朝鮮における唱歌教育史については高(一九九九)、中国における日本の唱歌の影響に関する史的検討については銭(二〇〇二)を参照。
- (2) ハウスクネヒトについては寺崎昌男・竹中暉雄・樽松かほる(一九九一)を参照。
- (3) 『尋常小学読本唱歌』当時の唱歌教育との関係については、鎌谷(二〇〇二)を参照。
- (4) 大和田の作詞した唱歌を、昭和女子大学近代文学研究室編(一九五九)を中心に若干の訂正を加えて挙げたものが以下の表である

(題に「唱歌」を含むもののみ掲出し、「軍歌」と題されたものを除く)。

表 大和田建樹作詞唱歌一覽

明治唱歌・幼稚の曲	明治二〇～三三	甲歌唱歌	明治三八年
尋常小学帝国唱歌	明治二五年	尋常小学唱歌	明治三八～三九年
高等小学帝国唱歌	明治二五年	行進唱歌	明治三九年
明治唱歌拔萃小学唱歌	明治二八年	陸海凱旋記念唱歌	明治三九年
明治唱歌拔萃中学唱歌	明治二八年	滿韓鐵道唱歌	明治三九年
新曲唱歌	明治二九年	女子日新唱歌	明治三九年
少年唱歌	明治三〇～三一年	地理教育東京名所唱歌	明治三九年
地理教育鉄道唱歌	明治三一年	地理唱歌海軍少年	明治四〇年
地理教育世界唱歌	明治三三年	韓国鐵道唱歌	明治四〇年
海軍教育航海唱歌	明治三三年	汽車汽船日本一週唱歌	明治四〇年
甲斐唱歌	明治三三年	日本名勝唱歌	明治四〇年
女学唱歌	明治三三年	高等小学唱歌	明治四〇年
国民教育忠勇唱歌	明治三四年	地理教育東洋唱歌	明治四〇年
日本文典唱歌	明治三四年	工業唱歌	明治四一年
菊地唱歌	明治三四年	上田周遊唱歌	明治四一年
風景唱歌	明治三五年	帝国唱歌神武天皇	明治四一年
富士唱歌	明治三五年	東海道唱歌汽車	明治四二年
東京府民公德唱歌	明治三六年	東京名勝遊び公園唱歌	明治四二年
戦争唱歌	明治三六年	山陽線唱歌汽車	明治四二年
国民唱歌日本海軍	明治三七年	九州線唱歌汽車	明治四二年
国民唱歌日本陸軍	明治三七年	堺市水道唱歌	明治四二年
家庭教育運動唱歌	明治三七年	唱歌教材我國兵士	明治四二年
日新唱歌	明治三七年	史談唱歌屋島合戦	明治四二年
花鳥唱歌	明治三七年	愛知県唱歌	明治四三年
十二月唱歌	明治三八年	名古屋唱歌	明治四三年

(5) 『堺市水道唱歌』については、山村定雄氏(元堺市水道企業管理者兼水道局長)の自伝(山村(一九九四))に言及がある。
 (6) 『明治唱歌』と翻訳詩との関係については瀧田(二〇〇〇)が言及している。また『日本文典唱歌』については大悟法(一九七三)や永野(一九九二)などの解説がある。

参考文献

- 伊藤正雄 二〇〇一 『新版忘れ得ぬ国文学者たち―井、憶い出の明治大正―』右文書院
- 大悟法利雄 一九七三 『大和田建樹の『日本文典唱歌』』『文学』四一・一
- 長志珠絵 一九九八 『近代日本と国語ナシヨナリズム』吉川弘文館
- 海後宗臣・仲新編 一九六九 『近代日本教科書総説 解説篇』講談社
- 鎌谷静男 二〇〇一 『尋常小学読本唱歌編纂秘史』文芸社
- 木村信之 一九六五 『唱歌教科書総解説』海後宗臣・仲新編『日本教科書大系近代編第25巻 唱歌』講談社
- 小出浩平 一九八二 『日本唱歌の歴史』金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌(下) 学生歌・軍歌・宗教歌篇』講談社文庫
- 高 仁淑 一九九九 『植民地支配と唱歌教育―統監府による唱歌教育政策を中心に―』『青丘学術論集』一四
- 子安宣邦 二〇〇三 『漢字論 不可避の他者』岩波書店
- 斎藤茂吉 一九五〇 『明治大正短歌史』中央公論社
- 坂本麻実子 一九九一 『明治時代の地理唱歌の出版と西洋音楽受容』『人間文化研究年報』一五
- 山東 功 二〇〇〇 『唱歌と文典―明治前期唱歌教材と音楽取調掛員―』『女子大文学 国文篇』五一

嶋田由美 一九九一 「他教科教育の補助的手段としての唱歌教育」

江崎公子編 『音楽基礎研究文献集別巻 解説』 大空社

昭和女子大学近代文学研究室編 一九五九 「大和田建樹」 『近代文学

研究叢書第十二巻』 昭和女子大学光葉会

鈴木敏雄 一九二三 『小学唱歌教授法精義』 広文堂書店

瀧田佳子 二〇〇〇 『アメリカン・ライフへのまなざし―自然・女

性・大衆文化』 東京大学出版会

竹中暉雄 一九八七 『ヘルバルト主義教育学―その政治的役割―』

勁草書房

寺崎昌男・竹中暉雄・樽松かほる 一九九一 『御雇教師ハウスクネ

ヒトの研究』 東京大学出版会

永野 賢 一九九一 『文法研究史と文法教育』 明治書院

新島 繁 一九五五 『日本の唱歌』 『文学』 二三・一二

日本教育音楽協会編 一九三四 『本邦音楽教育史』 音楽教育書出版

協会

藤原喜代蔵 一九四三 『明治大正昭和教育思想人物史第二巻 明治

後期篇』 東亜政経社

堀内敬三・井上武士編 一九五八 『日本唱歌集』 岩波文庫

山村定雄 一九九四 『終着駅 テルミーニ 山村定雄自伝』 自家蔵版

渡辺 裕 二〇〇二 『日本文化モダン・ラプソディ』 春秋社

銭 仁康 二〇〇一 『学堂楽歌考源』 上海音楽出版社

(さんとう いさお・本学専任講師)